

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づ く習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害 の再発・悪化のお それ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	
外用鎮痛・消炎薬															
抗炎症成分	インドメタシン 軟膏	インテパン 軟膏	鎮痛作用・抗 炎症作用を 有する。急性 炎症・慢性炎 症に対し強い 効力を示す。				0.1%~5%未 満(そう痒、発 赤、発疹) 0.1%未満 (ヒリヒリ感、 乾燥感、熱 感、腫脹)			・本剤又は他のイ ンドメタシン製剤に 対して過敏症の既往 歴 ・アスピリン喘息又 はその既往歴(重 症喘息発作の誘 発)	・感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化	原因療法で はなく対症療 法 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法も考慮	使用方法(誤使用のおそれ)	症状により、適量を1日数 回患部に塗布する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 薬形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱・腱鞘 炎、腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛
	インドメタシン 貼付剤	カトレップ	鎮痛作用・抗 炎症作用を 有する。急性 炎症・慢性炎 症に対し強い 効力を示す。				0.1%~5%未 満(発赤、 そう痒、発 疹、かぶれ) 0.1%未満(ヒ リヒリ感、腫 脹)			・本剤又は他のイ ンドメタシン製剤に 対して過敏症の既往 歴 ・アスピリン喘息又 はその既往歴(重 症喘息発作の誘 発)	・感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化	原因療法で はなく対症療 法 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法も考慮	使用方法(誤使用のおそれ)	1日2回患部に貼付する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 薬形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱・腱鞘 炎、腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛
	インドメタシン 外用液	インテパン 外用液	鎮痛作用・抗 炎症作用を 有する。急性 炎症・慢性炎 症に対し強い 効力を示す。				0.1%~5%未 満(そう痒、発 疹、発赤) 0.1%未満 (ヒリヒリ感、 乾燥感、腫 脹)			・本剤又は他のイ ンドメタシン製剤に 対して過敏症の既往 歴 ・アスピリン喘息又 はその既往歴(重 症喘息発作の誘 発)	・感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化	原因療法で はなく対症療 法 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法も考慮	使用方法(誤使用のおそれ)	症状により、適量を1日数 回患部に塗布する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 薬形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱・腱鞘 炎、腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛
	グリチルリチ ン酸	デルマクリン 軟膏	ステロイド様 抗炎症作用 (浮腫抑制、 肉芽腫抑制、 抗紅斑)				5%以上ある いは頻度不 明(過敏症)						眼科用として使 用しない。	通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布または 塗擦する。	湿疹、皮膚そう 痒症、神経皮 膚炎
	グリチルリチ ン酸	デルマクリン 軟膏	ステロイド様 抗炎症作用 (浮腫抑制、 肉芽腫抑制、 抗紅斑)				5%以上ある いは頻度不 明(過敏症)						眼科用として使 用しない。	通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布または 塗擦する。	湿疹、皮膚そう 痒症、神経皮 膚炎

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの				
ケトプロフェン	メナミン軟膏 後発品なし	急性炎症・持 続性炎症に 対する抗炎症 作用、鎮痛 作用を有する		頻度不明：ア ナフィラキ シニ様症状 喘息発作の 誘発(アスピ リン喘息) 接触皮膚炎 光線過敏症	頻度不明(局 所の刺激感、 色素沈着) 0.1～5%未 満(局所の発 疹、発赤、そ う痒感、水 疱・びらん) 0.1%未満 (局所の腫 脹、適用部の 皮膚乾燥)			本剤又は本剤の 成分に対して過敏 症の既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(喘 息発作の誘発) チアプロフェン酸、 スプロフェン、フェ ノプロラート及び オキシベンゾンに 対して過敏症の既 往歴(交叉感作性 による過敏症)	気管支喘息、感染 を伴う炎症、高齢 者、妊婦、産婦、授 乳婦等、低出生体 重児、新生児、乳 児、幼児又は小 児、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化	原因療法で はなく対症療 法 接触皮膚炎・ 光線過敏症 は使用後数 日から数ヶ月 して発現する ことがある。 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法も考慮	表皮が欠損して いる場合に使用 すると一時的に しみる、ヒリヒリ 感 眼及び粘膜に使用 しない 密封包装法での 使用はしない	症状により適量を1日数回 患部に塗布する。	下記の疾患なら びに症状の鎮 痛・消炎 変形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱・腱鞘 炎、腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛
ケトプロフェン	モーラス(貼 付剤)	急性炎症・持 続性炎症に 対する抗炎症 作用、鎮痛 作用を有する		0.1%未満(ア ナフィラキ シニ様症状、 喘息発作の 誘発(アスピ リン喘息) 5%未満、重 特別は頻度 不明(接触皮 膚炎) 頻度不明(光 線過敏症)	0.1～5%未 満(局所の発 疹、発赤、腫 脹、そう痒 感、刺激感、 水疱・びら ん、色素沈 着) 0.1%未満 (皮下出血)	頻度不明(過 敏症)		本剤又は本剤の 成分に対して過敏 症の既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(発 作の誘発) チアプロフェン酸、 スプロフェン、フェ ノプロラート及び オキシベンゾンに 対して過敏症の既 往歴(交叉感作性 による過敏症)	気管支喘息、感染 を伴う炎症、高齢 者、妊婦、産婦、授 乳婦等、低出生体 重児、新生児、乳 児、幼児又は小 児、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化 接触皮膚炎・ 光線過敏症 が悪化し、全 身の皮膚炎 症状が拡大 し重篤化	原因療法で はなく対症療 法 接触皮膚炎・ 光線過敏症 は使用後数 日から数ヶ月 して発現する ことがある。 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法	損傷皮膚及び粘 膜、滲疹又は発 疹の部位に對 して刺激がある ので使用しないこと	1日2回患部に貼付する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱・腱鞘 炎、腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛
ケトプロフェン	セクターロー ション 後発品なし	急性炎症・持 続性炎症に 対する抗炎症 作用、鎮痛 作用を有する		0.1%未満(ア ナフィラキ シニ様症状、 喘息発作の 誘発(アスピ リン喘息) 5%未満、重 特別は頻度 不明(接触皮 膚炎) 頻度不明(光 線過敏症)	0.1～5%未 満(局所の発 疹、発赤、腫 脹、そう痒 感、刺激感、 水疱・びら ん、色素沈 着) 0.1%未満 (適用部の皮 膚乾燥)			本剤又は本剤の 成分に対して過敏 症の既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(発 作の誘発) チアプロフェン酸、 スプロフェン、フェ ノプロラート及び オキシベンゾンに 対して過敏症の既 往歴(交叉感作性 による過敏症)	気管支喘息、感染 を伴う炎症、高齢 者、妊婦、産婦、授 乳婦等、低出生体 重児、新生児、乳 児、幼児又は小 児、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化 接触皮膚炎・ 光線過敏症 が悪化し、全 身の皮膚炎 症状が拡大 し重篤化	原因療法で はなく対症療 法 接触皮膚炎・ 光線過敏症 は使用後数 日から数ヶ月 して発現する ことがある。 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法を考慮	表皮が欠損して いる場合に使用 すると一過性な 刺激感 眼及び粘膜に使用 しない 密封包装法での 使用はしない	症状により、適量を1日数 回患部に塗布する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱・腱鞘 炎、腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛
サリチル酸グリ コール	配合のみ													
サリチル酸メ チル	サリチル酸 メチル「ミヤ ザフ」 後発品なし				過敏症		過敏症					5%又はそれ以上の濃度 の液剤、軟膏剤又はリニメ ント剤として皮膚局所に塗 布する	下記における 鎮痛・消炎 関節痛、筋肉 痛、打撲、捻挫 痛、腫脹	

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 常用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生する おそれ)		薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
ピロキシカム 軟膏	バキソ軟膏	アラキドン酸代謝におけるシクロオキシゲナーゼを阻害し、炎症・疼痛に関与するプロスタグランジンの生成を抑制することによるものと考えられている。抗炎症作用、鎮痛作用を有する。		0.1~1%未満(湿疹・皮膚炎、そう痒感) 0.1%未満(発赤、発疹、靴擦れ落せつ)	頻度不明(光線過敏症)		本剤の成分過敏症の既往歴 アスピリン喘息又はその既往歴(重篤な喘息発作の誘発)	気管支喘息、感染を伴う炎症、高齢者、妊婦、産婦、低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児、慢性疾患	感染を伴う炎症に用いる場合には感染症不顕性	原因療法ではなく対症療法 慢性疾患(変形性関節症)では薬物療法以外の療法		瘡皮が損傷している場合に使用すると一過性の刺激感 腫及び粘膜炎に使用しない 密封包装法での使用しない	本品の適量を1日数回患部に塗擦する。 高齢者には必要最小限の使用にとどめる	下記疾患並びに症状の消炎・鎮痛 変形性関節症 肩関節周囲炎 腱・腱鞘炎 上腕骨上顆炎(テニス肘等) 筋肉痛(筋・筋膜炎等) 外傷後の腫脹・疼痛
フェルピナク軟膏	ナバゲルン軟膏	プロスタグランジン生成抑制作用を有し、疼痛、急性炎症・慢性炎症に対し、鎮痛・抗炎症作用を示す。		0.1~1%未満(そう痒、皮膚炎、発赤) 0.1%未満(接触皮膚炎、刺激感、水泡)			本剤の成分過敏症の既往歴 アスピリン喘息又はその既往歴(発作の誘発)	気管支喘息、感染を伴う炎症、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児、慢性疾患	感染を伴う炎症に用いる場合には感染症不顕性	原因療法ではなく対症療法 慢性疾患(変形性関節症)では薬物療法以外の療法		瘡皮が損傷している場合に使用すると一過性の刺激感 腫及び粘膜炎に使用しない 密封包装法での使用しない	症状により、適量を1日数回患部に塗擦する。	下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎 変形性関節症 筋・筋膜炎 腱・腱鞘炎 上腕骨上顆炎(テニス肘等) 筋肉痛 外傷後の腫脹・疼痛
フェルピナク貼付剤	セルタッチ	プロスタグランジン生成抑制作用を有し、疼痛、急性炎症・慢性炎症に対し、鎮痛・抗炎症作用を示す。		0.1~1%未満(皮膚炎(発疹、湿疹を含む)、そう痒、発赤、接触皮膚炎) 0.1%未満(刺激感) 頻度不明(水泡)			本剤又は他のフェルピナク製剤に対して過敏症の既往歴 アスピリン喘息又はその既往歴(喘息発作の誘発)	気管支喘息、感染を伴う炎症、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児、慢性疾患	感染を伴う炎症に用いる場合には感染症不顕性	原因療法ではなく対症療法 慢性疾患(変形性関節症)では薬物療法以外の療法		損傷皮膚及び粘膜炎、湿疹又は発疹の部位に対して刺激があることで使用しないこと	1日2回患部に貼付する。	下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎 変形性関節症 肩関節周囲炎 腱・腱鞘炎 上腕骨上顆炎(テニス肘等) 筋肉痛 外傷後の腫脹・疼痛
フェルピナクローション	ナバゲルンローション	プロスタグランジン生成抑制作用を有し、疼痛、急性炎症・慢性炎症に対し、鎮痛・抗炎症作用を示す。		0.1~1%未満(そう痒、皮膚炎、発赤) 0.1%未満(接触皮膚炎、刺激感、水泡)			本剤の成分に対して過敏症の既往歴 アスピリン喘息又はその既往歴(発作の誘発)	気管支喘息、感染を伴う炎症、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児、慢性疾患	感染を伴う炎症に用いる場合には感染症不顕性	原因療法ではなく対症療法 慢性疾患(変形性関節症)では薬物療法以外の療法		瘡皮が損傷している場合に使用すると一過性の刺激感 腫及び粘膜炎に使用しない 密封包装法での使用しない	症状により、適量を1日数回患部に塗擦する。	下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎 変形性関節症 筋・筋膜炎 腱・腱鞘炎 上腕骨上顆炎(テニス肘等) 筋肉痛 外傷後の腫脹・疼痛

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果							
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ			薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象 の症状の判別 に注意を要 する(適応を 換えるおそれ)				使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用 により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象 の症状の判別 に注意を要 する(適応を 換えるおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果		
局所刺 激成分	カンフル	カンフル精 後発品の添 付文書を用 いた	カンフル局所刺 激作用を有 し、皮膚に塗 布すると発赤 又は冷感を生 じる				頻度不明(過 敏症)													患部に適量を塗布あるいは 塗擦する。	下記疾患にお ける局所刺 激、血行の改 善、消炎、鎮 痛、鎮痒、 筋肉痛、挫傷、 打撲、捻挫、凍 傷(第1度)、凍 瘡、皮膚そう痒 症	
	テレピン油	なし																				
	ハッカ油	内服のみ																				
	メントール	日本薬局方 メントール 「ミヤザワ」																			芳香・矯臭・矯 味の目的で調 剤に用いる	
	ユーカリ油	保険薬辞典 にはきよう み、きよう しゅう、着色 用のみある が添付文書 なし																				
	トウガラシエ キス	トウガラシチ ンキ エキ스가な かったため チンキで代 用をした 後発品なし					頻度不明(刺 激感、疼痛)			び爛、創傷皮膚及 び粘膜炎											①通常、トウガラシチンキ として、10~40%を添加した 液剤、軟膏剤、硬膏剤又は ハップ剤を1日1~数回 局所に塗布する。 ②通常、トウガラシチンキ として、1~4%を添加した 液剤を1日1~数回局所に 塗擦する。	皮膚刺激剤と して下記に用 いる。 ①筋肉痛、凍 瘡、凍傷(第1 度) ②育毛
	ノニルワニ ルアミド	なし																				
抗 ヒス タミ ン成 分	ジフェニルイ ミダゾール	なし																				
	ジフェニド ロミン	レスタミン コーフ軟膏	アレルギーを 塗布または皮 内注射したと きに起こる発 赤、膨疹、そ う痒などのア レルギー性皮 膚反応は、本 剤の1回塗布 により著明に 抑制される。				頻度不明(過 敏症)						炎症症状が 強い渗出性 の皮膚炎・適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用す る。								通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布また は塗擦する。	尋麻疹、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ
	マレイン酸ク ロルフェニラ ミン	外用の添付 文書無し																				

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重要な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	濫用に基づく 習慣性	適応薬品	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)		薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤 使用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
血行改善薬	酢酸トコフェロール ユベラ錠、外用しないので経口剤を使用。	微小循環系の賦活作用を有し、末梢血行を促す。末梢血管の透過性や血管抵抗性を改善する。抗酸化作用を有し、過酸化脂質の生成を抑制する。内分泌系の賦活作用を有し、内分泌の失調を是正する。		0.1~5%未満(便秘、胃部不快感)、0.1%未満(下痢)	0.1%未満(過敏症)							末梢循環障害や過酸化脂質の増加防止の機能に対して、効果が無いのにつれて、過剰に使用すべきではない。	錠剤 通常、成人には1回1~2錠(酢酸トコフェロールとして、50~100mg)を、1日2~3回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. ビタミンE欠乏症の予防及び治療 2. 末梢循環障害(間歇性跛行症、動脈硬化症、静脈血栓症、糖尿病性網膜症、凍瘡、四肢冷感症) 3. 過酸化脂質の増加防止
外用湿疹・皮膚炎薬	ニコチン酸ベンジル 配合のみ													
ステロイド 抗炎症成分	甘草酸酢酸プレドニゾン リドメックス コーワ軟膏・クリーム・ローション	局所抗炎症作用、血管収縮作用(軟膏・クリーム・ローションとも同等的作用)	・(眼瞼皮膚への使用時)眼圧亢進、緑内障、白内障 ・(大量又は長期にわたる広範囲の使用、密封法・ODT使用時)緑内障、白内障等	軟膏: 刺激感0.17%、毛のう炎・せつ0.08%、そう痒感0.07%、皮膚疹の増悪0.07%、カンジダ症0.01%など クリーム: 刺激感0.24%、毛のう炎・せつ0.21%、皮膚疹の増悪0.21%、そう痒感0.05%、白癬症0.03% ローション: 1例(0.09%)に白癬、皮膚の真菌症、細菌感染症及びウイルス感染症(密封法・ODTの場合、起こり易い。) ・長期運用: ざ瘡様発疹、酒さ様皮膚炎、口囲皮膚炎、ステロイド皮膚、多毛及び色素脱失等、ときに魚鱗屑様皮膚変化、一過性の刺激感、乾燥 ・(大量又は長期にわたる)	過敏症	細菌・真菌・スピロヘータ・ウイルス皮膚感染症及び動物性皮膚疾患(疥癬、けしらみ等)(感染症悪化)、本剤の成分に対し過敏症の既往歴、鼓膜に穿孔のある湿性外耳道炎(穿孔部位の治療の遅延及び感染の恐れ)、潰瘍(ペーチェット病は除く)、第2度深在性以上の熱傷・凍傷(治療の遅延)、原則禁忌 皮膚感染を伴う湿疹・皮膚炎・高齢者・妊婦及び妊婦の可能性がある婦人・小児への大量又は長期にわたる広範囲の使用を避けること。	おむつ使用	皮膚感染を伴う湿疹・皮膚炎に使用しないこと(適切な抗菌剤による治療が併用)。	使用部位: 眼科用として使用しないこと。 使用方法 患者の化粧下、ひげそり後などに使用することのないよう注意すること。	・大量又は長期にわたる広範囲の密封法(ODT)等の使用により、副作用皮膚質ステロイド剤を全体的投与した場合と同様な症状があらわれることがある。・長期運用により、ざ瘡様発疹、酒さ様皮膚炎、口囲皮膚炎(ほほ、口唇等に潮紅、丘疹、膿疱、毛細血管拡張を生じる)、ステロイド皮膚(皮膚萎縮、毛細血管拡張、紫斑)、多毛及び色素脱失等があらわれることがある。また、ときに魚鱗屑様皮膚変化、一過性の刺激感、乾燥があらわれることがある。・大量又は長期にわたる広範囲の使用、密封	通常1日1~2回、適量を患部に塗布する。なお、症状により適宜増減する。また、症状により密封法を行う。	湿疹・皮膚炎群(進行性指掌角皮症、ピダゲル苔癬を含む)、痒疹群(固定じん麻疹、ストロフルスを含む)、虫さされ、乾癬、掌跖膿疱症		

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 適用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量	J 効能効果	
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌		慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)				使用方法(誤使用のおそれ)
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの								
							る広範囲の 使用、密封法 -ODT使用 時)下垂体・ 副腎皮質系 機能の抑制									
	酢酸プレド ニゾン	外用はなし (眼軟膏は あり)														
ステロイド 抗炎症成分	デキサメタ ゾン	オイラソ ンD	局所抗炎症 作用・皮膚血 管収縮作用 デキサメタ ゾンはヒドロ コルチゾアセ テート、プレ ニゾンアセ テートと同等 の血管収縮 作用を示すこ とが認められ ている。				頻度不明 (皮膚の真菌 症(カンジダ 等)、細菌感 染症(伝染性 膿疱疹、毛の う炎等)及び ウイルス感染 症、長期連 用、酒さ様発 疹、酒さ様皮 膚炎・口囲皮 膚炎(頬、口 囲等に潮紅、 丘疹、膿疱、 毛細血管拡張 強)、ステロイ ド皮膚(皮膚 萎縮、毛細血 管拡張、紫 斑)、多毛、 色素脱失、魚 鱗屑様皮膚 変化、大量・ 長期、下垂 体・副腎皮質 系機能の抑 制、後のう 白内障、緑内 障)	頻度不明 (過敏症)	細菌・真菌・スピ ロヘータ・ウイルス 皮膚感染症(感染 症の悪化) ・本剤の成分に対 し過敏症の既往歴 ・鼓膜に穿孔のある 湿性外耳道炎 の患者(鼓膜の再 生を遅らせ、内耳 に重篤な感染性疾 患を起こすおそれ) ・潰瘍(ペーチェッ ト病を除く)、第2 度深在性以上の 熱傷・凍傷(創傷 治癒を妨げるこ とがある)、高齢 者・妊婦及び妊娠 の可能性がある婦 人への大量又は 長期投与、原則禁 忌 皮膚感染症を 伴う湿疹・皮膚炎	・小児の大量又は 長期にわたる広範 囲の密封法(ODT) 等の使用(おむつ は密封法と同様の 作用がある)。	皮膚疾患を 伴う湿疹・皮 膚炎に使用 しないこと(適 切な抗菌剤 による治療か 併用)。	・眼科用として使 用しないこと。 ・眼あるいは眼 周囲及び結膜に は使用しないこ と。 ・本剤は皮膚疾 患治療薬である ので、化粧下、ひ げそり後などに 使用することの ないよう注意す ること。 ・塗布直後、軽い 熱感を生じること があるが、通常 短時間のうちに 消失すること。 ・長期連用によ り現れること がある。(酒 さ様発疹・酒 さ様皮膚炎・ 口囲皮膚炎 (頬、口囲等 に潮紅、丘 疹、膿疱、毛 細血管拡張 強)、ステロイ ド皮膚(皮膚 萎縮、毛細血 管拡張、紫 斑)、多毛、 色素脱失、魚 鱗屑様皮膚 変化)	通常1日2~3回、適量を 患部に塗布する。	・湿疹・皮膚炎 群(進行性指 掌角皮症、女 子顔面黒皮 症、ビダール 奇癢、放射線 皮膚炎、日光 皮膚炎を含む) ・皮膚そう痒症 ・虫さされ ・乾癬		
	ヒドロコル チゾン	酪酸塩あ り。ロコイ ド軟膏・クリ ーム														



鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化		
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの		薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			適量使用・誤使 用のおそれ
非 ス テ ロ イ ド 抗 炎 成 分	ウフェナマ ート コンベック軟 膏・クリーム	抗炎症作用、 鎮痛作用を 有する。本剤 の抗炎症作 用は副腎を 介さず、炎症 部位に直接 作用するもの であり、服安 定化及び活 性酸素生成 抑制作用な ど、生体膜と の相互作用 により発揮す るものと考え られる。						・本剤の成分に対 し過敏症の既往歴				・使用部位：眼科 用として使用しな いこと			本品の適量を1日数回患 部に塗布または貼布す る。	急性湿疹、慢性 湿疹、脂漏 性湿疹、貨幣 状湿疹、接触 皮膚炎、アト ピー皮膚炎、 おむつ皮膚 炎、酒さ様皮膚 炎、口囲皮膚 炎、帯状疱疹



鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果・症状の悪化 につながるおそれ		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
	詳細の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		濫用に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化		
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
	ブフェキサマ ク	アンダーーム 軟膏・クリー ム	抗炎症作用 鎮痛作用				・軟膏：発赤 (0.74%)、そう 痒(0.71%)、 刺激感 (0.57%)、丘 疹(0.25%)、 熱感(0.14%) 等 0.1~5%未満 (そう痒、刺 激感、熱感) 0.1%未満 (色素沈着 注、乾燥化、 落屑、乾皮症 様症状) ・クリーム： 刺激感 (2.66%)、発 赤(1.33%)、 乾燥化 (1.00%)、そう 痒(0.85%)、 熱感(0.85%) 等 0.1~5%未満 (刺激感、乾 燥化、そう 痒、熱感、落 屑、色素沈着 注、乾皮症様 症状) ODT法で汗 疹、毛のう 炎、膿皮症	頻度不明(過 敏症)				本剤の成分に対し 過敏症の既往歴			・使用部位：眼科 用として使用しな いこと。	長期使用に よる色素沈着 が見られること がある		本品の適量を1日1~数回 患部に塗布する。 なお、必要に応じて貼布療 法、密閉法-ODT療法を 行う。	軟膏：急性湿 疹、接触皮膚 炎、アトピー性 皮膚炎、おむ つ皮膚炎、日 光皮膚炎、酒 さ様皮膚炎、口 囲皮膚炎、帯 状疱疹、熱傷 (第I-II度)、皮 膚欠損創 クリーム：急性 湿疹、接触皮 膚炎、アトピー 性皮膚炎、日 光皮膚炎、酒 さ様皮膚炎、口 囲皮膚炎、帯 状疱疹
抗 炎 成 分	グリチルリチ ン酸	デルマクリン 軟膏	ステロイド様 抗炎症作用 (浮腫抑制、 肉芽腫抑制、 抗紅斑)					5%以上ある いは頻度不 明(過敏症)						眼科用として使 用しない。			通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布または 塗擦する。	湿疹、皮膚そう 痒症、神経皮 膚炎	
	グリチルレチ ン酸	デルマクリン 軟膏	グリチルレチ ン酸は急性 炎症に対する 抗炎症作用 (浮腫抑制- ラット、肉芽 腫抑制-ラッ ト、抗紅斑-モ ルモット)を有 する。抗炎症 作用は主成 分であるグリ チルレチン酸 の化学構造が γ-ヒドロ コチゾンの 化学構造に 類似している ところによると 推定される。					5%以上又は 頻度不明(過 敏症)						眼科用として使 用しない。			通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布または 塗擦する。	湿疹、皮膚そう 痒症、神経皮 膚炎	